

音韻イメージ〈なゐ・地震〉

2011年5月29日 岡林みどり

目次

- 1、はじめに
- 2、音韻〈な〉の日本語における重要性
- 3、文明の基盤である度量衡に埋め込まれた音韻〈な〉・・・・・・・・・・ p 3
- 4、漢字〈地〉を〈土・也〉に分解してみる・・・・・・・・・・ p 5
- 5、和語〈なゐふり〉〈なゐより〉とは何か・・・・・・・・・・ p 7
- 6、二字漢字語〈地震〉を四字漢字〈土・也・雨・辰〉に分解してみる・・ p 8
- 7、「地震」の原義は「地鳴りと津波と」である・・・・・・・・・・ p 8
- 8、「いすくわし くぢら障る」の意味を考える・・・・・・・・・・ p10
- 9、方法について・・・・・・・・・・ p11

1、はじめに

旺文社の全訳古語辞典では〈な=地・ゐ=居〉と説明され、さらに〈地〉の原義を〈大地〉と置いている。日本国語辞典でははっきりと「大地が振動すること」と書いてある。だが、これでは〈鼻音の有無；な・た〉を過少に評価することにならないだろうか。

さらには広辞苑では「うぶすながみ」の〈な〉を〈土〉とおいて、「産土^{うぶすな}・神^{かみ}」を直接導いている。しかし現代日本語話者の直覚からすれば「産土な神・産土なる神」という語根解釈の方が「便利な神・便利なる神」と対応がとれて合理的である。そう仮構してみると、〈す=土〉を導くことができる。これは〈つ=土〉と容易に通底する。

2、音韻〈な〉の日本語における重要性

前置きはこれくらいにして、そもそも、現代日本語の音韻は、古層にどのような外国語からの影響があるかにかかわらず、五十音図のイメージに強くしばられ、ついで単拍漢字がこれを支える。だから以下の両対語が重要であると直覚するべきである。

菜な・の野	奈な・ね根
現象する菜・存在する野	見える果実・見えない根

類書では、よく〈な・ね・の〉の三元系で日本語語根を抽出したような記述も見られるが、日本語を考える時には三元系をそのまま用いると多くの場合はぬかるみに入り込んでわけが分からなくなる。日本語の正数は偶数と心得るべきだ。だからここではさらに〈に〉を加えて以下の対語をも抽出すべきであろう。

丹に・ね根
塊・延長

こう大胆に仮構すると、次には以下のさまざまな対語が鮮やかに浮かび上がってくる。

あかい丹・根くら	奈良・野良	元気な泣き声・虫の音 ^{なみ}
あかり・くらやみ	漢川・田畑	泣きをいれる・弱音をはく

頭をやわらかくするためにはまだまだ連想を続けていく必要があるし、できるはずだが、本題にもどろう。

結論から言うと、〈音韻な〉の原義を、科学技術立国日本国の語彙の中核から探すならば、それは〈ながれ・ながい〉以外は考えられない。そのところが辞書世界からすっぱり抜け落ちているというのは興味深い。それは戦前から戦後にかけての科学が存在論に縛られていたからである。洋才以前にはまず「万物は流転する」ということが「武士・もののふ」の玉条として身体化されていたはずなのだが、明治以降は「確かなものは、不動である」が「頭でっかちの知識人」の金科におきかえられてきた。

それで、多くの辞書は「な・大地」という還元で満足している。そのイメージはさらに「不動の大地」として固定されてしまった。

だが、陰陽五行は大地を〈黄寅〉とイメージしている。それは農業耕作の歴史をちょっと振り返ればあまりに当たり前のことだと思う。文明の発祥地はすべて大河の流域である。それは黒い水の流れと白い砂州の縞々模様なす空間域(國)を含意する。

参考文献； <http://homepage2.nifty.com/midoka/papers/nanayou.pdf>

さらには、そこは洪水によって肥沃な土壌が流れてくる土地だから何年も連作が可能になるのである。そして多くの場合、それは乾季と雨季に分かれた気候を意味していた。そこでは「不毛の白土と豊饒の黒土」の交代による時間の継続量をも意味していた。

このイメージが現代日本語から見えにくいのは「縞々模様」と「島」が同じ音韻を共有しているからであるが、警察の隠語である「～組のシマ」という単語には「点々模様」というよりは砂州の「州しま」が直裁にイメージできる。

さらに日本語の音韻〈な〉について考察を続ければ、〈地〉の旁からは〈なり・也〉が導かれ、加えて〈なな・七〉〈なる・成〉〈なり・形〉もすぐに視聴覚野に入ってくる。

こういう風に思考を徹底して展開していく人々がほとんど見られないのは、日本のエリート層が与えられた課題を指定された範囲内で要領よく、まとめることを推奨する大学入試むけの練習をあまりに多く繰り返してきたからである。

その結果、日本の多くの研究者が文献アカデミズムに墮落し、データ妄信・エビデンス尊崇の奈落の底でのた打ち回っているに過ぎないことを研究だと思い込んでいる。そして大学入試の援用に過ぎない相対優位争いのコンテスト・競技会、審査会が、科学なき技

術立国では花盛りとなっている。どれも知恵がなくても、歴史に対する責任感が欠如していても回っていくものばかりだ。ここからは、価値だけは生じない。それを価値と言いくるめていくのが根回し。

それを支えるのが 1000 年以上続く日本の官学の伝統的方法である。その方法は、富永仲基によって抽出され、本居宣長によって指定された「加上・異部名字難必和會・三物五類立言」にまとめられる。これはまた、そのような学問の退廃から抜け出す道筋もまた明らかにする。日本語話者が人文科学や社会学を志す場合には必須の方法を示唆してくれる。

一般文献；『大阪の町人學者富永仲基；内藤湖南』
http://www.aozora.gr.jp/cards/000284/files/1735_21416.html

3、文明の基盤である度量衡に埋め込まれた音韻〈な〉

さらに加えるならば、日本の人文・社会科学を劣化させている原因の一つが以下のことを身体化していないことにある。すなわち、文明の基本は度量衡であって、文明の果実もまた度量衡が支え続けていくことを。いくら文理融合だの教養だの産学連携だのの掛け声をかけても、中心に来るものが分からなければ共同のしようがない。

度量衡を現代日本語に interpretation するならば、〈ながさ・おおさ・おもさ〉である。さらに言えば、静止系では〈ながさ〉が重要で、運動系では〈おもさ〉が基本。実用系では〈おおさ〉。給料が多いのか少ないのか。獲物が多いのか少ないのか。それが民心の中核にくるのは当然であり、この概念から、まずは数量化が社会全体に浸透していった。それゆえに、「量の多少・数の大小」の対義がひろく社会に流通していった。

だが、計量とは結果でしかない。それでも、それゆえに徴税実務者にとっては至上の概念である。すなわちかつての権衡・権門家、今の内閣府にとっては。だから彼らは対象を計数できるかどうかの一点に関心を集中し、結果にすぎない計量データをエビデンスと称して、人々を「データ陛下の赤子」へと還元しようとする。

だが、その殿上人である権門家の下で仕事をしてきた地下人たち、生産基盤の構築・保守・管理・運営の実務者にとって、大事なものは「長さ・重さ」であり、両者を適宜弁別しながらも、組みあわせることで、的確迅速な推量が可能になる。だから TRINITY の国である英国の語文でも、大事なものは〈measures and weights〉。これを現代日本語で整理すると以下。

かつて	殿上人	公共・つとめ	地下人
今	本社中枢	共同・かせぎ	事業現場
関心	数字の大小	量と質	長さ・物量の多寡・重さ
規範	手続き	質と実	手順

もっと言えば、推量とは予測であり、それはエビデンスなき時にエビデンスなしで行

われる営為である。この営為を支えるのがプリミティブな直覚。そこでは行為は手探りとならざるをえない。だからこそ知識は頭に入っているだけではいざという時に役に立たないのだ。いざという言うときに役立つ知識を「身体化された知識」という。それは万人に見えるものではないが、個々人の力量そのものである。

参考文献； <http://homepage2.nifty.com/midoka/papers/doryokou.htm>

さて、次に <音韻ゐ>を取り上げてみよう。辞書では<居>しか考慮していない。そこに現在の学問とメディアの病理＝事物の中を探せば事物の本質が見つかる＝という要素還元主義以前の「思い込み還元主義」が見て取れる。これは先ほど定義した大学入試適応型知性と通底している。思考の範囲を広げることには極端なまで臆病である。そして重箱の隅をつつくようなことを延々皆で仲良く行うことが研究だと思い込んでいる。

なぜ、他に〈猪〉〈偉〉〈位〉などが、正字〈ゐ〉とされてきたのか。あるいは日本語には〈ゐのしし・いぬ・ひと〉〈ゐだい・ひせん〉〈ちゐ・ゐち〉などの対語・組語が存在するのかを、省みようとしな

だが、日本語では、語頭の〈イ段音韻〉はある時期に語義の富貴卑賤の目印として使われてきている。それに加えて語末音韻と語頭音韻の弁別にも使われる、という複雑な歴史を持っている。だから、語義を正しく推量するときには弁別したり、差異を零に内挿したりを繰り返してその本義を類推する作業が必須なのである。そうすればさらに
 〈奴婢ぬひ・いぬ犬〉〈つい対・疋ひつ〉〈とひ・いと〉〈ひと・とび〉〈四位しゐ・ひし菱〉
 〈四面体しゐ・いし石⇄岩いわ・わゐ環面体〉などの対語が思い浮かんできて、現代日本語のいくつかのばらばらな単語たちが語彙としてまとまってくる。

そういう作業をとおして、〈音韻ゐ〉が体言中の体言であることを実務者は確信していく。逆から言えば、〈音韻な〉は用言なのである。だから以下。

な	ゐ
長い流れ	ゐ位くらい
なり なりて なる <small>なり</small> 形	蔵・倉・鞍・庫・座
用言・insistence	体言・existence

参考文献； <http://homepage2.nifty.com/midoka/papers/russell.pdf>

上の二語を逆序でつなげば、〈体言・用言〉〈用言・体言〉の二句ができる。だが、ある時期の日本語は、語末母音と語頭母音を書き分けていたから辞書を編纂する過程で混乱が起きている。その混乱を正して原義を探るためには、少なくとも古今集、新古今集、そして契沖万葉学の三つの層を視野に置く必要があることだけをここでは想起しておく。

二語句	文体	代入例1	代入例2	代入例3	代入例4	代入例5
なる	ななる	長な井	流るな井	投げな井	鳴くな井	便利な井
ゐな	ゐがな	井が長	井が流るな	井に投げな	井が鳴くな	井が便利

以上をまとめれば、文明の基盤である度量衡については長い歴史の中で、民間ではさまざまに用いられてきているから、多くの単語が存在する。それらを一度は五十音図を土台にまとめておく必要があることが分かってくる。こういう資料が基礎資料、あるいは社会的インフラと呼ぶべきものである。たとえば平安期の歌語としても有名な「田居」「四位」などは、当時の文語であって、一拍語根からの由来語〈た多〉〈し弛也池〉があると見ることができる。そうすると、次に新しい二拍語根を推定する作業が可能になる。

そこから〈たか位〉〈しか位〉などを導ける。それらの韻を踏んで列挙すれば以下のようになる。

な系列 (舌音)		
度	量	衡
ながさ度	ながれ量	なしじふん (梨地粉)
雍なぎ	栲たく	鎮しづ
な位ゐ	た位ゐ	し位ゐ
なげし・にがし	たけ (丈)	シケ (てる)
ながい・デカイ	たかい・たかみ	しげり・しげみ
な嵩かさ・デカサ	た嵩かさ	さ嵩かさ
なか・のど・どの	たか・とこ・こと	さか・そこ・こそ
なら・あな	たら・あた	しら・あし

ほぼ系列 (吻音)		
度	量	衡
おほきさ	おほさ	おもさ・おもり
はかる	おしはかる	おもんばかり
かんがみる	わかる・わける	おもんじる
ひろ・ひし	はば・はか (抄 zhi)	干し・乾燥重量

4、漢字〈地〉を〈土・也〉に分解してみる

次に漢字〈也〉について考察をすすめる。まず関連する日本語字を総覧してみよう。

		なり	ほか	ち	いけ	ゆる	なな	あい	へび	
セ	セ	也	他	地	池	弛	七	匕	它	匕
	mie	ye ヤ	ta タ	di デ	chi チ	shi シ	qi シッ	bi	ta	

上の表を完成するためにいろいろな漢字字典を繰っていくと、いずれも原義に「細長い」があることがわかる。さらに〈他・它〉は、両者とも、訓〈た・ほか〉を媒介に関連付けられていることも分かった。さらに〈弓〉は飛び道具であるだけでなく周代には、土地測量の単位で「弓=歩=六尺」とも出ていた。

これにより、現在のように工業製品があふれているわけではなかった古代にあつては、測量とはくねくねした (zigzag) 線分を微小な直線の集まりとして積分する作業から始まっていたことを思い出すことができた。つまり、ある円周の大きさを求めるためには、その上に〈弛〉の長さの紐をおいて円周をなぞってから、改めて紐を〈引〉つ〈張〉って求めた紐の長さが〈張〉となるわけだが、その二つの値の関係は数学的には決まらない。そこに不正を入れこむ余地があり、それを防ぐ検地実務能力が求められてきた。

そして、この時に、基準になるには〈張〉であつて、〈弛〉ではない。とすれば対語〈弛・張〉は、対義〈外延・内包〉となる。そして国字〈弓〉が〈引〉と対語を作る。まとめると。

外延・内包	現象・存在
弛・張	引・弓
extension・intension	insistence・existence

ここまで考えてくると、次に国字〈弓〉を現在〈テ〉とのみ読ませていることが日本語史を見えにくくしているのでは、ということに気がつく。逆に言えば、よく引用される「互爾呼波」は本来「e/i/o/a」の四段を含意していたのではないか、という仮構が浮かんでくる。そう仮構すると現在、三段しかないヤ行は、〈弓〉から作られた〈ユ〉が「引 i・弓 u・弓 e」の三つの音韻をひき受けていた可能性が見えてくる。

その上で、中の 4 つの会意文字をじっくり眺めていくと、その偏はカタカナと密接な関連があることがさらに見えてくる。整理すると以下。

	他	地	池		弛	会意
偏	イ	土 ←反転→ チ	シ⇄水の意味		引弓弓⇄ユ (キユエ)	カナ変換
正序	イナ (否)	チナ (?)	シナ (品)	ミナ (水)	キナ (zigzag)	現象
逆序	ナイ (無)	ナチ (那智)	ナシ (産)	ナミ (波)	ナキ (長位)	存在

この表中で、現代日本語話者の直覚では、意味を取りにくいのは〈チナ〉である。そこで数日考えが止まったが、答えは案外簡単に見つかった。〈地鳴り〉である。〈ナチ〉は那智の滝として日本古来の聖地であるが、当然瀑布の音も迫力があるものと考えられ、その轟音はすざましいものと考えられる。逆語序対〈地鳴り・那智の滝〉が取り出せる。

現在では聖地那智は水の聖地のイメージが強いが、流れ落ちるエネルギー一般の聖地であった蓋然性は、ここ火山列島、日本においては高いものと考えの方が合理的である。

さらにもう一例、逆語序対〈血流し・なじる〉もあげておこう。

チナ	地鳴り	血流し
ナチ	那智の滝	なじる

5、和語〈なみふり〉〈なみより〉とは何か

ここで、慣用句として用いられていた四拍語について考えておく。漢字は「震り」「揺り」を当てているようだ。

まず「震り」であるが、これは「振り」と旁^{つくり}を共有しているから、なんとなく当然のように思われるが、そういう関連付けでは不十分ではないかという考えもある。分解して以下のように考えるとむしろ〈震ふる〉から〈振ふる〉が導かれたとも考えることができる。

雨	ウ	ウツ	fウ	ふ
辰	シン・タツ	タツ龍リュウ	リ	り

「揺り」の方は「遙」「謡」と旁を共有するし、共に音はyaoであることに着目して「弛^{ゆる}い」を想起しておく方が逆語序対〈也弓・弓也〉として語彙化される。

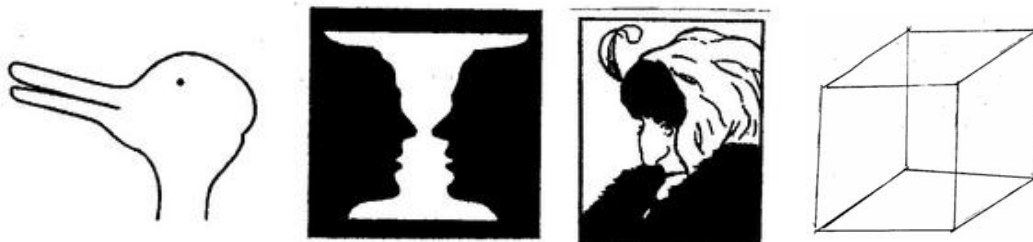
弛 ^{みな}	弓	ユミ	ゆ	揺	揺也
	也	ナリ	なり	也	
也弓 ^{なみ}	也	ナリ	なり	也	也揺
	弓	ユミ	ゆ揺	揺	

このように展開してみると、四拍和語〈なみふり〉〈なみより〉は以下のように会意文字以前の素漢字とも言うべき形象の、とりわけ度量の概念をもつ〈弓〉を中核にした4字の組み合わせと関連付けることができる。

也土雨辰	なちうり	なちゆり	なみより	也弓弓辰	なみゆり
			なみふり	也弓雨辰	

どの可能性を選択するのは、〈人為・天為〉〈現象・存在〉〈図・地〉〈空間・対象物〉などの対義（ゲシュタルト）を唯一つの要素に還元しやすいという人間の認知の原理にどの程度の注意を払うのかによって、あるいはそもそも識字社会ではとりわけ表裏関係の一方だけが語彙として広く用いられるようになって、経時的には語義が狭く狭くなっていきやすいという言語変化の通弊をいつも意識して歴史を紐といていくかの、研究者自身の立ち居、立ち位置、あるいはその研究者の置かれている社会的地位の相違である。

図；凸凹同源



6、二字漢字語〈地震〉を四字漢字〈土・也・雨・辰〉に分解してみる

上のように頭をどんどん柔らかくしていくと、次に、気がつくのは〈土雨〉は逆序すれば〈雨土あめつち天地〉となり『千字文』冒頭が導けることである。そして〈玄黄〉は以前導いたように黄色と黒色の縞模様であるから、〈長い〉が原義であり、これは漢字〈辰〉とあまりに似ている。

千字文の冒頭	
天地玄黄	宇宙洪荒
日月盈昃	辰宿列張
寒来暑往	秋收冬蔵

そうすると女性器ともひさげ匱ともいわれるものを象った〈也〉が〈玄〉に対応づけられ、午前 8 時ごろをさす〈辰〉が〈黄〉に対応することになる。すなわち。

雨土・也辰	あめつち・玄黄
-------	---------

ここまで考えてくると自然に〈雨〉は次のように二通りに分解できる。

工+冂+水	雨	干+冂+：
-------	---	-------

そして実は、これは長年考えてきて未だ完全に確信しているわけではないが、〈天〉からは以下の変形が導けるのではないだろうか、と考えている。

天	工+冂	工+冂+水	天+水	雨
---	-----	-------	-----	---

そうすると雨のイメージも一新する。要するに天からの水、〈天水あまみず〉。これは地上に降ってくる雨水の元である水蒸気一般、あまねく存在する水蒸気全体を指すと見る方が合理的である。だからこそ「雷電」のような使い方もでてくる。

7、「地震」の原義は「地鳴りと津波と」である。

ここで、改めて最初に戻って〈土・也・雨・辰〉をしげしげと眺めてみよう。上のように要素を一つ一つ調べ上げた結果から、これは以下のように読み解ける。

地震	地面から黒い穴が生じ、地割れと地鳴りがして、 天からは水蒸気のような白くて長い流れが震えながら降ってくる
----	---

なんのことはない。地鳴りと津波とを描写しているのだ。

このような、漢字の造語法は辞書には明記されていないが、現代日本語の言語使用の実態をよく観察すればすぐに気づく。たとえば。

地震	波浪	質実	論理	情実	私と父と
地鳴り＋雨の辰	横波＋辰浪	質実剛健	論考と道理	情理と誠実	Father and I
震地	浪波	実質	理論	実情／実状	父の子・私の父
なち	たつなみ（津波）	実（質）をとる	道理の論考	実際の状況	Son of Father

さて、ここまで来れば、すぐに京都御所にある「紫宸殿」

の屋根の形が思い起こされてくる。今回テレビで映された津波の映像は高台からのものだったからすぐには結びつかなかったが、もしも浜辺で1000年に1度という、あの大波に向かったら、それはまさしくあの屋根を下から仰いだように感じられたはずだ。というよりもあの屋根は巨大津波の記念碑だったと考えるべきなのだ。それはまた天照大神の太陽信仰の古層にある〈雷神〉ならぬ〈雷震〉信仰を呼び覚ましてくれる。それはその姉君を岩戸の奥へと押し込めた荒ぶる神の本体である。



付け加えておくが、近代天文学の召使に甘んじている文献学者が主張するようには日食が当時の民衆にとって日照りや暴風雨のような天変地異と同列に受け取られていたとは、筆者は考えない。これは御用学者が自分たちの権威を高めるために民衆というよりは宮廷の中の無知蒙昧な輩を恐怖に陥れて金品を貢がせるために利用されてきた事象だと考えるべきだ。『古事記』のような公民教育のツールに取り上げられるべき森羅万象にはあたらない。

また慣用句「地震、かみなり、火事、親父」の「地震」には津波もがはっきりと埋め込まれていることを改めて思い起こしておきたい。というよりここでの「火事」はむしろ今回テレビで映されたように地震で倒壊や流出した家屋からの出火をもイメージしている。そして緊急時にあっては怒鳴って家人を指揮する親父もまた常態であったのである。つまり4つのばらばらな事象ではなく一続きの事象としてこれからは記憶に残していくべきである。

さらには、『口遊；源為憲』に出てくる「雲太、和二、京三」についても、仏教が民間信仰として定着していった、これは計量思想の浸透とも一致していることを学校社会科は教えないのであるが、要するに平安後期以降の解釈

雲太	復元・大社殿	高さ 48M
和二	奈良・大仏殿	高さ 47M
京三	京都・大極殿	？
1855年	京都・紫宸殿	高さ 20M

とは異なる解釈の可能性を読み解くことが可能になってくる。すなわち「雷・大日・震」のメタファを。そうすると本居宣長のこだわっていた「水神」も、単なる恵みの神というだけでなく荒ぶる神の性格を内に秘めていることが了解される。

となれば、当時の公民教育の真髓が「二重の三元システム」にあって、現在始まったばかりの総合教育であったことに賛嘆と驚きの念を禁じえない。

技術革新	焼畑 物作	乾燥 貯蔵	水田 農耕
メタファ	雷	大日	震
災害	大火	日照り	大水
祭事月	神無月	水無月	如月

8、「いすくわし くぢら障る」の意味を考える

『古事記；中巻』には、神武東征にあって、彼らが兄宇陀斯を惨殺した場所である「宇陀の血原」の由来がでてきて、さらに事前に内通した「宇陀の氷原」出自の弟宇陀斯の献上歌謡を採録している。その内容は「罌に嶋はかからず、鯨がかかった。そして老いた本妻は飢えるが、若い後妻はおいしいものを食べられた」という現代ヒューマニズムからはバッシング、焚書坑儒、放送禁止になりそうなものである。

学校で習った時には後半部の差別主義がいやで、忘れていたが、「鯨を高城でとろう」というのは比喩にしても奇妙だと思ってなんとなくひっかかっていた。

ようやく、今回、河北新報に出ていた観光船「やまゆり」の映像をみて「鯨も山にのぼりうる」と確信した。あれは、間違いなく大津波とその津波の後に人々をおそった貧窮ぶりを歌ったものである。



忘れてはいけないのだ。

ところが二字漢字語〈地震・じしん〉では、音韻からも字形イメージからも「地鳴り・津波」のイメージは伝わってこない。仕方ないから「大」をつけて「大・地震」とすることで「怖いぞ！大変だぞ！」ということを公民に刷り込むようになる。あげくに「大地・震」と語根を勝手に変えて「なみ・ふる」と訓をつけてしまったのが文献のみに加上する日本語学者たちである。

だから、掛け声「地震大国」からは具体的な「津波の恐怖」は抜け落ちてしまった。当然なのだ。京都も奈良も山間地だし、東京も大津波の確度は低いのであるから。今、原子炉を避けるように、昔は津波をさけて都は建造されてきた。

それ故に、テレビでしょっちゅう出てくる「震度」では、ただの「earth quake」としてのみ子供たちが思い込むのも仕方ないのである。だが〈揺れ quake 微震〉は体感結果の一つにすぎない。一方、地鳴りのする地割れ (crack) も津波 (billow) も、歴然たる自然

現象である。それは magnificent なエネルギー放出現象である。

だから、今後のスローガンは具体的に「地鳴り津波の国・日本」と、多少面倒でも、多少長ったらしくても、鼻音の音韻を踏んだ和語（和国語文）に変更したほうがよいと考える。どうしても二字漢字語というならば abbreviation を用いて「地津^{じしん}大国」とするのもよしであるが。

一般文献；『漢字が日本語をほろぼす；田中克彦』

9、方法について

ここで用いた展開方法と結果について、多くの方は、納得されないであろう。

私自身、上のように読み解くためには、日本語学を脱構築するための正しい方法をまず開発し、この方法に基づいて漢字学の勉強をしてきた、都合二十年近い年月と、テレビを通してではあるが実際の津波の脅威をこの目で体験する必要があった。さらに加えて原子炉爆発事故のことが大きく心にのしかかってきた二ヶ月をすごして、ほとんど、「不動の大地」など思い込みに過ぎないことがわかった今だから、このように謙虚に読み解くことが可能なのだ。

ここに文化を継承する難しさと、そして尽きせぬ興味がある。文献をいくら積み上げても、文化を継承することはできない。だが、文献がなければ個々人の体験を歴史の中に位置づけることはできない。

それでも、確かなことは個々人の想像力を活性化するのは、個々人の体験だけであり、想像力に支えられた営為だけが文献を文化として生かえらせることを可能にする。

まずは個々人の営為がなければならない。

歴史とはひき継がれる営為の総和だ。行為が羅列された年表には還元できない。

以上

「平安朝和文資料にみとめられる量語彙の体系について；安達隆一 1972年」を疑う

ここでは「長い」は俎上にすらのぼっていない。だが、日本国語大辞典には「古事記」「万葉集」からの出典語がのっている。何より「古今集仮名序」では「長柄」「夜の長き」ときて、最後に「かづら長く伝はり」でしめている。これは当然掛詞で、「かづら長く、永く伝はり」と読むべき内容である。まさに、物量の原義に度量があることを失念しっぱなしの戦後国語教育の欠陥を証明する論考である。

『論集 日本語研究 12 有精堂 1980』